ヴィラ・マーヤ便り

一般財団法人 知と文明のフォーラム　ニューズレター

「マーヤ」はサンスクリット語で「幻」の意。
ヴィラ・マーヤは伊豆高原にある「知と文明のフォーラム」のセミナーハウス。

2012年9月29日　No.5

シンポジウム

知と文明の転換のために

パネリスト（発言順）

坂本義和（国際政治学）

大内秀明（経済学）

岡部憲明（建築）

西村朗（作曲）

司会と補遺：北沢方邦（構造人類学）

（二〇一一年一〇月一日、日本出版クラブ会館にて開催された一般財団法人「知と文明のフォーラム」設立記念会でのシンポジウムを再録しました）

坂本義和

二一世紀の地球政治的課題

第四次戦争

私は年齢的に体力に自信がないので、東北の現地に行くことができず、実際に行った人が撮ってきた写真を見せてくれたのですが、その一枚目を見た瞬間に、私は思わず「あ、これは戦争だ」と叫びました。私にとって、実は、第一回目の戦争が一九三二年の上海事変、つまり三二年の満州事変を中国へ拡大するために、日本軍がでっちあげの事件を口実に上海で起こした戦争です。当時、私は四歳過ぎの子どもでしたが、たまたま病気になったため引き揚げができず、病院で悲惨な負傷兵を大勢見ました。それが私の第一次戦争。第二次はアジア太平洋戦争で、自分は何のために兵隊になり死ぬのか、悩みました。第三次が戦後の冷戦で、いつ核戦争で自分も世界も終わるのかという恐怖に毎日脅かされていた時代。そして今度の東北大震災が、第四次の戦争と受け止めています。

震災の写真は、見るにたえないものが多かった。ことに、流されていく人たちまで写っていて慄然としました。よく、皆さんやメディアはガレキという言葉を使いますが、私は強い抵抗感をもつのです。広辞苑によれば、ガレキとは、「瓦と

小さい石」という意味なのです。しかし私にとって、あれは単なるガレキではなく、戦争による遺骸です。というのは、ガレキのなかにヒトの骨も入っているだろうし、生き残った人にとり、かけがえのない写真やモノが混じっているでしょう。それをガレキというのは、私には納得いかない。「残骸」であれば遺骸も入っていると言えるでしょう。私には、そうしたひっかかりが消えません。

一国孤立主義への回帰

今日は世界政治について話せと言われていますが、政治というのは、「ナマズが首相になる」と野田首相が自称するような世界ですので、「知と文明」というような格調高いお話はできないのですが、三点申し上げたい。

二〇世紀は、戦争の世紀だったと言われるが、二一世紀とは何だろうか、ということを考えて、今日は、それを「三重のたたかい」という言葉で表わしたい。「たたかい」というのは戦争という意味では必ずしもありません。ひらがなで「たたかい」、抗争ということでしょうか。

三点のうちの第一は、国家の間の「たたかい」です。アメリカの一極支配、いわゆるヘゲモニーの衰退ということが言われている。これが、二つの違った結果を生みつつあると思います。一つは、一極支配が不可能になれば、多国で協調する、いわゆるマルチラテラリズムでいく可能性を考えた人が米国にもいます。事実、そういうふうにオバマも初めは言っていた。しかし、米国のヘゲモニーの衰退のもう一つの結果は、一国孤立主義への回帰という反応です。アメリカは世界から手を引く、その代わり、アメリカの軍事力だけは強めておくが、世界の他の国のことは構わない。共和党にはそういう傾向が強い。オバマの大統領再選はキツイと私は思っていますが、そうなると共和党自身だけでなく、オバマも、「多国協調」という言葉で、アメリカの軍事力は強めるが財政的に限界があるので、他の国に軍事負担を増やさせる。それが「国際協調」であって、だから日本もそうすべし、ということになる。そういう意味では、本来はハト派的である「多国協調」が今のままだと、タカ派と実質的には違わなくなる傾向がある。とくに米国が中国を念頭において力を入れているアジア・太平洋では、そうなる危険があるのではないか。

四極体制

それを象徴的に現わしている一例は、オバマがつい最近国連でとった行動です。一方では、パレスチナとイスラエルとの和解のために国際的に力を合わせようと言って、他方では、もうアメリカ一国が仲裁をする時代ではないと言った。ところが、いざ、パレスチナの国連加盟という提案が出てきたら、アメリカは必ず拒否権を使うと言っている。つまりアメリカ一国で駄目にしてしまうのです。それがさきほど言った両面だと思う。オバマは、アメリカの内外の形勢を見ていて、そういうダブルトークをやったんだと私は解釈しています。その意味で、アメリカはさまざまの点で、あてにならない国になると思われます。

アメリカの一極支配が弱まった結果生じたのは、いわゆる多極化、無極化とか言うが、ことにＢＲＩＣｓ（ブラジル ロシア インド チャイナ）、少なくともこの四国が、一種の四極的な体制をつくるのではないかと言われている。このなかで、とくにロシアとインドと中国は核兵器をもっている。核兵器をもっていながら、ＮＰＴいわゆる核拡散防止体制が大いに必要だと力説して、他の国、たとえばイランや北朝鮮はもってはいかんというわけです。これは、こうした「新興国」のヘゲモニーを維持するためだと思う。

核軍縮の理由

他方で、オバマは、一昨年ですか、プラハで「核兵器のない世界をつくろう」と言って、広島や長崎の方をはじめ世界の多くの人に非常に喜ばれました。しかし私は、あの時から、何か胡散臭いなと思っていた。というのは、彼が核兵器のない世界を言った少し前に、アメリカの有力な政治家四人が、やはり「アメリカのイニシアチヴで核軍縮を積極的にやろう」と言った。キッシンジャー、シュルツ元国務長官、ペリー元国防長官、ナンという上院の元軍事委員長、要するにいざとなれば力を使うのが当然だというリアリストの大物たちが、核兵器のない世界をつくるイニシアチヴをアメリカがとろうじゃないかと、「ウォールストリート・ジャーナル」で、二回にわたって言って、反響があった。この時も、これ胡散臭いと思ったのですが、なぜ大物現実主義者が、突如「核軍縮」を言い出したかというと、核兵器がテロリストの手に渡ったらアメリカは大変なことになるから、それを防ごうという狙いであって、本気になって「核兵器のない世界」をつくろうと言ったのでないと私は感じました。オバマの演説は、きれいな演説でしたが、政治的な背景にはそういう含みがあるのではないかと疑いをもったのです。

戦争「ゲーム」、「ロボット」戦争

これらの国は自分たちはもつが、他の国はもつなと言って、自国の軍事力を強化することは変えない。それは核兵器以外の領域でもそうで、事実、すでに始まっています。アフガニスタンで無人機が、数百機飛んでいると言われる。それが爆弾を落とす。例のオサマ・ビンラディンは、はじめ山岳地帯で、パキスタンの政府の手のおよばない、トライバル・エリア、普通の人は入れない険しい所にいた。アメリカも手が出せなかったのですが、無人機という新兵器で猛烈に爆撃した。たくさん人が死んだのです。それで、ビンラディンはパキスタンに逃げた。そして、ああいう結果になった。無人機は非常に使いやすい。テレビにも出たが、操縦はアメリカ本土の快適な操縦室でやる。殺人や破壊というよりゲームをやっているようなもの。これを使えば、アメリカ兵は死にませんから、国内での不評を避ける役に立つ。現地では、アフガンやパキスタンの、たくさんの市民を含めて、多くの「敵」を殺すことができる。数は絶対発表しない。

もう一つ、私は、人間の戦争でなくロボットの戦争の時代が来るだろうと思っています。血を流すとデモクラシーのもとでは具合が悪い。今度の大震災でもロボットの話が出たが、米軍の方がはるかに発達している。それらは、どちらも核兵器でなく「通常兵器」と呼ばれる非核兵器に違いないが、ロボットや無人機を使えば凄惨な戦争ができる時代がくるかもしれない。来ないことを望みますが、そういう危険を頭に置いておく必要がある。

リビアの教訓

しかし現在の危険は、核兵器をもっていない国は、もとうとする。無人機とまでいかなくても核兵器はもたないと、もっている国に蔑視され、対等な主権国家として認められない。北朝鮮は、その点をしきりに主張している。リビアのカダフィ政権が倒れた際、フランスとイギリスという核保有国の爆撃機が、致命的な打撃を与えた。あれを見て北朝鮮がどういう教訓を得たか。「独裁は長くは続かない」という教訓を得たのであれば結構だが、そうではない可能性が大きくても不思議ではない。つまり、カダフィが核兵器を廃棄し、アメリカやイギリスが多いに賞賛し、北朝鮮に「おまえもカダフィ・モデルを見習え」と説教したことがありますが、説教どおり核兵器を捨てたから、リビアは今度のようなことになったのだから「われわれは決して核兵器を手放すな」という教訓を得たと思う。北朝鮮がこうした「教訓」を得たことは、日本も十分考慮に入れておかねばならない。

また近頃日本が非常に危惧しているのは、中国の海軍が外洋に進出し始めたことである。私も、これがいいとは思わない。しかし、考える必要があることは、アメリカの強力な第七艦隊が過去五〇年間ずっと中国の沿岸近くにいたという点です。中国本土と台湾の間の台湾海峡にもアメリカの艦隊が入ってくると、中国は手が出せないできた。中国は、はるばる遠くからアメリカ艦隊が来て封じ込められているという状態を我慢し続けたわけです。アメリカはもう少し下がれと、言いたくなるのは不思議ではない。もし逆にサンフランシスコ沖に中国の空母が出ていったら、九・一一と同じようにアメリカは大変な騒ぎになるでしょう。だから、中国の海軍力の増強にはそれなりの理由があるということを承知の上でアジア・太平洋の軍縮と平和の課題に日本も真剣に取り組んでいかねばならない。

食料と水をめぐる資本の「たたかい」

時間の使い方が悪かったので、第二に、資本の「たたかい」について簡単に述べ、第三の市民の「たたかい」は、その後にします。

常識的なことだが、いわゆる再生不能なエネルギー、石油とかガスを確保することが、新興国や途上国の需要の増大もあり、時とともに、難しくなっています。もう一つ、これからだんだん深刻になるのは、食料だと思う。中国は、アフリカのアンゴラとかブラジルに広大な農地を借りています。そこへ中国から労働者が行き、食料をつくって本国に送り、本国の食料不足を補っている。自国だけでは食料が賄えないという問題が中国で急増している。日本も、四〇％近くは輸入しているわけです。これが、世界でどういう問題を起こすかというと、一つは食料の価格が上がる。食料の価格は、シカゴの世界穀物市場で大きく決まる。そこでたとえば、穀物が一ブッシェルという単位で一ドル上がると、たぶん数千人を こえるアフリカ人が餓死すると言われている。食料価格が上がると、われわれも困るが、貧しい国で飢えている人にとっては、死を意味するのです。

また、これから問題になると思うのは、水です。われわれが飲んで使ったりできる水は、地球上の水の〇・〇一％。あとは塩水、氷、氷山です。なぜ水が問題になるかというと、食料を増産するには水が必要ですから、世界人口の増加により、これからもっと水を飲食することになる。それから、工業化が進むと工業用水も増える、都市化が進むと生活用水も増えてくる。こういうなかで、いったい世界で水の将来がどうなるのだろうか、考えてみますと、そこで、カネがある人間は食料も水も手に入りますが、貧しい人間は飢えるか、不潔な水で病気になったり、ついには死ぬことになる。つまり、世界的な格差が非常に大きくなっていくのが二一世紀の「資本のたたかい」ではないかと思います。第三の「市民のたたかい」は、あとで時間があれば付け加えます。

大内秀明
東日本大震災と文明の大転換
宮澤賢治とW・モリスに学ぶ

被災地の宮澤賢治

今朝、仙台から出てまいりました。仙台は被災したということもあり、いろいろ災害の問題で多忙です。いま、坂本先生から、最初の戦争、一九三一年の上海事変のお話が出た。一九三一年は私が生まれた年。三三年が、宮澤賢治が亡くなった年です。九月二一日午後一時三〇分、南無妙法蓮華経を唱え、自分の身体を拭いて静かに亡くなった。この日は、毎年「賢治祭」が開かれ、全国から賢治を偲んで集まる。賢治の里、花巻ですが、「賢治の里で賢治を朗読する会」があり、私も仙台で朗読グループに入っているので、今年も参加して『月夜の電信柱』を朗読しました。たまたま今年の「賢治祭」は台風一五号とぶつかったのですが、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」の賢治ですから、「賢治祭」を中止するわけにいかない。近所の小学校の講堂で小学生一一〇人くらいが、「雨ニモマケズ」を朗読したり、「精神歌」を歌ったりした。

賢治は花巻農学校の先生をしていた。戦後、農業高校になりましたが、今も生徒たちが賢治を自分たちの先生だと思って、賢治の教育を受け継いでいる。たとえば、賢治の作品に『鹿踊りの始まり』というのがある。花巻の伝統芸能ですが、賢治は昔、今でいうサークル「鹿踊り」部活を始めたのを、今でも生徒が続けている。これが評判で、中国に招待されて公演している。今度も「賢治祭」で踊ってくれました。今も、賢治の精神が花巻に生きている。三・一一大震災のあとで、「雨

エネルギー革命の歴史

今度の災害、地震があり、津波があり、もう一つ福島の原発事故が重なった。私が教師として、東京から仙台の大学に来てから、来年（二〇一二年）で五〇年になります。最初に仙台に来た時から今まで、自分の暮らしを振り返ってみたい。その昔、東北は貧しかったが、まだ日本全体が、東北に残されている自然エネルギー、自然資源を活用して、戦後日本の経済を立て直そうとしていた。東北には、豊かな森林資源もあるし水資源がありました。驚いたのは、仙台では風呂に入るのに亜炭を使っていた。石炭になる前の亜炭です。これは火持ちがよいので、朝まで何度も入れる。ずっとこれを使うのかと思ったら、僅か二、三年のうちに、例のエネルギー革命が起こり、三井・三池炭鉱が閉鎖され、常磐炭鉱も常磐ハワイアンに変わりましたが、亜炭鉱も潰された。エネルギー革命で、中東から安い石油を輸入する方向に、日本の経済構造が変わった。輸入資源エネルギーを使うから、輸出主導でやって行こう。しかも六〇年安保で経済安保体制が出来上がり、東京・京浜、名古屋、大阪、この三大工業地帯をつないで重化学工業地帯にする。昔は、北九州も入れて四大工業地帯だったのですが、これは駄目。日本海側ですから。それをカットしての三大工業地帯です。その延長上に太平洋ベルト構想があり、日本経済は高度成長を進めることになった。

東北の開発構想

私の家の風呂も、亜炭から石油風呂に代わった。そのうち、七〇年代オイルショックが起きて天然ガスのほうがいいと、仙台に市営のガス局も生まれて、ガス風呂に代わる。そのうちに「オール電化」という宣伝が始まり、電気で湯を沸かして、それを風呂に使い始めた。老人にはオール電化の生活が安心・安全かつ便利と言われ、その電気は原発国家の「安全神話」の下、原子力の平和利用で供給されることになってきた。福島の原発、これは東北電力でなく、東京電力ですが、どういう経緯で出てきたか？

原発も、初めからあった話ではない。七〇年代に入る時点で出てきた。私は東北の開発について勉強してきましたが、原子力を本格的に活用しようとしたのは、さきの太平洋ベルト地帯構想があって、その延長上です。さらにそれを拡大発展させるには、巨大開発基地が必要であるとし、適地としては、北は北海道の苫小牧東部、むつ小川原、南の九州は志布志湾が考えられた。志布志湾には、中東の石油の備蓄基地を置く。東北・北海道はどうか？　その時に、内々に議論して決めたのが、東北・北海道は「原子力＋石油」で行く。それで七〇年代に入ると、太平洋ベルト地帯の延長上の福島に六基、原発が集中的につくられた。元来は、亜炭のような自然エネルギーから始まった東北の開発が、原子力に切り替わってしまった。それが、今回のフクシマ原発事故につながったことは、あまり言われていませんが、私の仙台生活半世紀から東北の発展を見ての結論です。

自然エネルギーの地産地消

今、原子力か自然エネルギーか、という選択を迫られている。まだまだ東北は、自然エネルギーが豊かです。太陽光だけは、全国平均と同じだそうです。日本列島は、日の丸が国旗になる位ですからね。「日の丸発電」にすればいい（笑）。風力は、東北は全国の一六％、地熱が二五％、温泉がたくさんあり、花巻にも仙台にもある。大型でなく小型水力が三一％。だいたい東北は五％経済と言われているが、自然エネルギーはその何倍もあります。この自然エネルギーを活用すれば、原子力なんか必要ない。これははっきりしている。そういう方向で、エネルギーを地域の自然エネルギーに変えればいい。

「地産地消」という言葉があって、仙台でも農家の野菜を地場で売り買い取引している。地産地消の根本は、エネルギーを地産地消にして地域に密接した産業を興していく。共同体・コミュニティを建設するとき、昔は水利、水エネルギーを共有しながら、農家は水のやりとりしながら、地域のまとまりをつくっていった。賢治も、お互いの連帯の精神、地域の絆

ニモマケズ」の賢治の気持ちに戻りたい、という若い人たちの声を聞くことができました。文明の転換は、賢治精神に戻る、という地点から考えたらいいのではないか。そんな気持ちです。

自然との共生

これは、賢治精神につながると思うのですが、非常に小さい本です。『小さな町を呑み込んだ巨大津波』。「やまもと民話の会」の文集です。山元町は、福島県に隣接した宮城県の町、六割が今度の津波にやられた。高齢者の「おばあさん」達が、テープレコーダーやパソコンも机もない、そんな今だからこそ、真実を伝えられるものを残す、と文集を出した。もう三刷、マスコミはまだ取り上げてくれませんが、皆に広がっている。やはり、自然に逆らっちゃいけない。ここに書いてありますが、昔の漁師たちは、地震があって津波が来る時は、舟に乗って沖に出た。今の若い漁師たちは、そのことを忘れて、家に帰り、車に乗って逃げようとして、車の渋滞で津波に呑まれて亡くなった。やはり自然と一緒に生きるのを忘れたところに、今回の災害もあったし、また近代科学技術文明の行き詰まりが示されたのではないか。ここに書いてありますが、これを鮨にすると最高に美味しい。これで日本酒のいいのを飲んだら……。漁師たちはホッキが生き返る、自然の回復力を信じています。

賢治は一九三三年に亡くなっているが、生まれたのは一八九六年。この年は、ウィリアム・モリスがイギリスで亡くなった年。生まれ変わりみたいですが、モリスの芸術思想を賢治はしっかり受け止めています。モリスは、ご存知の通り詩人で工芸デザイナーですが、マルクスの『資本論』を読み、社会主義者でもあった。そのモリスの芸術思想を、賢治も熱心に読んで『農民芸術概論綱要』を書き残している。今、ここに居られる森淳一さんに頼まれて、平凡社新書『ウィリアム・モリスのマルクス主義』を書いていますが、モリスから賢治の流れが、近代科学技術文明を乗り越えるために、是非とも必要だと痛感しています。

で「羅須地人協会」をつくり活動した。それを近代化で皆失ってしまった。もう一度、地域の自然エネルギーの地産地消で考え直し、皆で共有して利用し合えば、そこに新しいコミュニティ・共同体が生まれてくる。ウィリアム・モリスの共同体社会主義の考え方です。

仙台の電気と水

他の機会につくったスライドですが、見て下さい。仙台には有名な広瀬川がある。広瀬川と名取川が一緒になって、河口は名取川。そこに名取市、すぐ南が山元町ですが、河口の閖上（ゆりあげ）、津波にやられましたが、ここには「波の音」という地酒があり、赤貝がいい。ハマボウフウという刺身のツマも生えています。それを蘇らせねばいけない、という名取市です。

対岸が荒浜。仙台市の荒浜の惨状ですが、途中から広瀬川に沿って遡ると、今も自然エネルギーに関連した施設が並んでいる。東北大学の下あたり、三居沢の「電気百年館」の写真です。ここは一八八一年、明治二一年ですが、「宮城紡績」という民間会社が、日本で初めての水力発電を建設した。それが今も残って発電していますが、大正元年に仙台市が買収して市営の電気部ができた。仙台市が電気事業をやり、市民の電気を供給していた。この時、電気事業で仙台市の財政は大黒字、宝の山だった。ところが戦争中、統制経済で合併し、発電・送電・配電を一緒にして、家庭から金属製品を献上させたのと同じように、仙台市民の手から軍国主義の国家が召し上げて、それを戦後、東北電力に渡したのですが、今も残っている「電気百年館」です。

東北大学では、すでに自然エネルギーを使った大きな実験施設ができている。全部太陽光で直流のまま家庭で使えるようにして、蓄電の機械もたくさん試作している。風力発電も、広瀬川の沿岸にある。仙台市の「水道記念館」、さきほど水のことを坂本先生も言われたが、ここで昔、仙台市の水道事業が始まった。この頃ダムはなかった。ところがダムできて、今仙台市内中心部はぜんぶダムの水を飲んでいる。しかし、広瀬川上流に行くと、その水は沢の水です。ダムの水飲んでいるから、こんなペットボトルの水を買わなきゃいけない。沢の水は味が違う。作並温泉に行く手前にニッカ・ウイスキーがある。ニッカ・ウイスキーは沢の水でつくっているからいい（笑）。ここは、上流の源流に近いところにある私の別荘「賢治とモリスの館」。沢の水をたくさんご馳走しますから、どうぞお出かけ下さい。亡くなった青木やよひ先生にも褒めていただいた思い出がある「賢治とモリスの館」です。

モリスと賢治の継承

賢治とモリスの思想から、自然エネルギーをもらうこと。モリスの言葉に「生活に役に立たないものは家に置いてはならないのです」とある。二〇〇九年でしたが、東京都美術館で、朝日新聞が主催した『アーツ&クラフト展』の宣伝の言葉です。余計なものを買ってはいけない。さらにここが大事ですが、「芸術は労働における人間の喜びの表現である」。これは一八四年にオクスフォード大学でモリスが講演した折の言葉です。自らマルクスの『資本論』を読み、ここで「俺は社会主義者だ」と宣言した。この言葉をさきほどの賢治が『農民芸術概論綱要』中でわざわざ英文を引用し、「芸術をもてあの灰色の労働を燃やせ」と表現した。賢治も、少なくとも花巻農学校の終わり頃から亡くなるまで、『資本論』を読み、マルクスの社会主義の思想を受け継ぎながら、モリスを継承している。賢治の蔵書のなかに、『資本論』もモリスの『ユートピアだより』もあります。それらを読んで、羅須地人協会の生徒たち、農民達と一緒に、イーハトーボの理想郷を目指していた。少なくとも私達は、その志を受け止めながら、賢治精神を受継ぎながら、生きたいと思います。

岡部憲明
パブリックスペースと人間性
ポンピドーセンターの「自由」

公共施設のデザインについてお話したいと思います。

最初に挙げますのが、私が関わったパリの公共建築の一つポンピドーセンターです。これは一九七七年に開館しました。ご記憶の方も多いと思いますが、一九六八年に五月革命があり、そのあとフランスの精神風土が荒廃しました。翌年にポンピドー大統領が提案して、新たな大衆のための芸術の中心をつくろうという企画ができました。六八年の改革はある意味挫折したが、そうした内容を受けながら、市民により開かれた新たな試みの総合文化施設をつくりだすことを目標としていました。

今ご覧いただいているのが、パリの中心部を南側からみた画像です。右側にあるのがノートルダム寺院で、その左に色がついているのが、ポンピドーセンター。パリのなかで唯一色がついている建物と言えます。パリ北側のモンマルトルの丘から見ても、一つだけやはり色がついて見えるのがポンピドーセンター。フランスの知性とヨーロッパのさまざまな知識人が集まって、プログラムをつくりました。総合的文化センターとして、美術館だけでなく図書館さらに〈IRCAM〉という音響音楽研究所も入っています。総合的な文化センターを、まさにパリの一番真ん中につくる。ご覧のようにパリの街並みからかけ離れた宇宙船みたいな建物が国際コンペで選ばれて、実現しました。設計・建設中はフランス人一般からの批判は大きかったのですが、できあがってから後はそういうことはなく、今はパリになくてはならない建物になっている。今まであったルーヴルのような古典的な、古い宮殿を使ってつくる美術館とまったく違う形で、オープンなものにするという理想の下につくられたもの。誰でもが自由に入れる公

広場（ピアッツァ）から見たポンピドーセンター

共文化施設で、現在夜九時まで、当初は夜一〇時まで開館していました。しかもパリの中心につくるので、電車に乗れば郊外の自宅にも三〇分で帰れます。立地条件は、非常に重要です。

東京でたとえば、東京フォーラム、用途は主として展示場、会議場ですが、あそこに美術館つくって遅くまで開ければ利便性は大きく上がったと思います。そうしたことが、パブリック性の根幹にあると思います。センター前の広場も重要です。パリには、イタリアと違って人間のためと言える広場がないのです。建物を見たり、記念碑的なものを見るためにある広場や、あるいは道路交通上の広場になっている。「ピアッツァ」とイタリア語の名をつけたのは、広場で人が集ってなんでもできることが重要だということを示しています。建物全体で一〇万平米あります。非常に大きな規模と内容をもつが、それ自体の重さを見せないで軽い建物として成立しています。広場に集まる人たちが自由に活動できます。

世界とつながる「透明性」

この建物自体がパリの屋並みから半分以上飛び出している。四八メートルですから。だいたいパリでは二八メートル位で屋根が切られている。ということは、この建築の上部に昇るとパリ中が見えてきます。建設当初のコンセプトでは最上階まで無料で昇ることができましたが、二〇〇〇年以降は残念ながら最上部に昇るには有料になりました。二、三階の図書館までは無料です。多くの市民や観光客はパリの中心にあるセンターからパリと対面することができます。

年間五〇〇～六〇〇万人が利用します。公共性の根本は、「皆が利用することができるか」にかかっていると思います。多くの人々が何をやっているかが見える「透明性」も大事。中も見え外も見える、そのことで世界がつながっています。広場から入口に入ったところは、一九世紀から二〇世紀初頭に建てられたヨーロッパの駅にたとえてデザインされました、フォーラムと呼んでいます。自由に入れる空間です。美術館は四、五、六階にあります。夜遅くまで、食事したあとも訪れることが可能です。

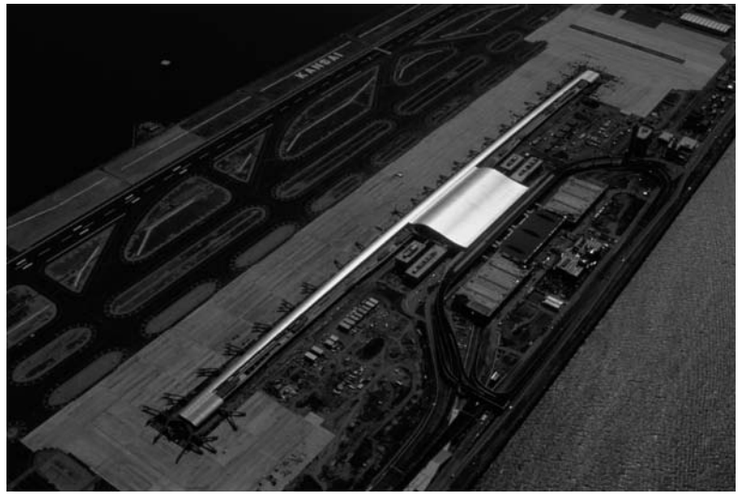
人間のための広場

エスカレータを上がっていくと、都市がだんだん見えてきます。

この建物、五〇×一六〇メートルの柱のない空間を六層積み上げています。デザインの中心になったのは、ガーブレッドという鋳物です。鋳物は一九世紀に発達して消えていった材料だが、現代技術で復活しています。何故鋳物かというと、やわらかな表現が可能だからです。一見、足場のように見えるが、じっと見ていると親しみやすさが出てきます。センターに隣接してもう一つ広場があります。ストラヴィンスキー広場です。この広場の地下に、音楽家のピエール・ブーレーズが初代所長を勤めた〈IRCAM〉があります。〈IRCAM〉は最初ポンピドーセンターの本体内部に入れようと思ったが、規模が大きく、むずかしかったため、センターわきの小学校を移設し、地下に〈IRCAM〉、地上に広場をつくりました。広場より敷地隣の歴史的建造物の教会が見えるようになりました。センターのピアッツァと同様、皆が集まって寛げる人間のための広場をつくろうという計画です。噴水はしばらくあとでできました。当初、ブーレーズは、「いい建物で嬉しいけど、失敗は唯一広場が寂しいね」と何度も言って、そういう思いが募って、パリ市とポンピドーセンターが協力してできたのが、ニキ・ド・サンファルとティンゲリーによる噴水です。とても市民から親しまれています。建物は全部地下で二重床、雑音を遮断するシステム。エスパス・ド・プロジェクションという一番大きなホールでは、音響時間〇・八～四・八秒まで残響を変えられる。広場のわきの煉瓦のタワーは〈IRCAM〉、事務棟です。〈IRCAM〉は、ポンピドー大統領が亡くなったときに予算を減らされ、せっかく掘った穴を半分埋め戻して面積を減らされた。どうしても足りないので、しばらくあとにタワーをつくりました。全体的には、音楽に関するさまざまな活動をしていて、中には教育施設も入っているし、豊かな音楽のライブラリーをもっています。

人間的空間としての関空旅客ターミナルビル

次に、関西空港旅客ターミナルビルのお話をします。一九八八年からこの仕事に五年ほど関わっていました。機能性や建築におけるさまざまな要求に加えて、人間的な感性を無視してはいけないという点を大切にしました。空港の島は、一二五〇×四三七〇メートル、五〇〇ヘクタール。比較的小さな空港ですが、建物自体が長さ一・七キロメートルあります。


関西国際空港旅客ターミナルビル 鳥瞰

当時、世界最大級の建物で、しかも内部の大空間には間仕切りがありません。札幌の大通公園全体に屋根をかけたと思ってください。巨大な建物のなかに人間性を加えることができるか。外形を見たときに、病院や学校でなく空港らしいものをつくりたい。四一機のジャンボ機が駐機できます。航空機の値段は一五〇～二〇〇億円。このパワーに対抗して、大きさに意味をもたせる形態を、それもエコノミカルにつくる挑戦です。八万二六〇〇枚のステンレスタイルで、メンテナンス・フリーでつくる。それが空の輝きを映して美しく見えなければならない。日本の伝統空間にある瓦の美しさをデザイン上の考えに取り入れています。

どこにいても自分の位置がわかるように巨大空間をつくっています。長さが一・七キロメートルあるが、構造体は非常に細い。鋼管シェル構造といって、たいへん軽やかな構造のシステムでつくることができます。ジョイント一つ一つのデザインに力をそそぎました。この建物の特徴である流体的な形態は、内部の天井の形と外部の形態が同一の幾何学的原則でつくられています。長さ一・七キロメートル、天井の高さ一八メートルの大空間であっても、構造部材は直径四〇センチが最大です。ターミナル中心部のメインターミナルビルですが、天井部分ではオープンエアダクトという凧のような形の布でできている装置で大空間の空気制御を行ない、低い位置では人のいる空間だけを丁寧に空調することで、空調の量を減らすことができます。天井には機器が付いていない。照明もオープンエアダクトを反射板として使っています。

一九九四年九月に開港、一ヶ月後に台風の直撃がありましたが、なんとか無事。一九九五年一月には阪神大震災が起きました。震源から三〇キロ、非常に揺れたがガラス一枚割れていません。複雑な地震力吸収メカニズムが見事に働いてくれました。人工島自身が液状化を起こさず、建築自体も無傷で残ったことで震災後の物資の受入れに役だちました。

やすらぎと豊かさ

二〇〇五年に運行を始めた小田急ロマンスカーVSEについて話します。新宿から箱根まで行く車輌です。電車の設計を建築家がやることはめったにないが、小田急電鉄が私に頼んだ理由は、路線の風景を理解し、ときめきを感じる内部空間をデザインしてくれることが可能な建築家を求めてのことでした。自家用車と違って、鉄道車輌はパブリック、誰もが利用する。子どもからおじいちゃんまで老若男女が使う。小さな空間をいかに豊かにつくるかということを前提に、誰もが乗るところにデザイン性の優れたものをもち込んで、やすらぎとときめきのある空間をテーマとしました。外観は列車が走ると風景が変わって見えるデザインをめざしました。

ベルギー大使館のお話をします。東京にイタリアのような広場らしい広場をつくりたいと考えました。旧ベルギー大使館の敷地を使い、真四角な広場ではなくて不整形な広場を提案しています。これらは都市空間に豊かさを与えることができるイタリアの広場が歴史的にもっている特質です。大使館には珍しく都市に突出している。閉じていると同時に、一階部分は、開かれた形でデザインしました。大使館としての意味をもたせる表象にしたいと考えました。不整形なゆえに豊かさをもつ都市広場と大使館を一体化させる。大使館外装はポルトガル産のライムストーンです。テカテカに光らせず、マットな仕上げにしました。大使館の建築の自立した存在と開かれた都市広場の形成をめざしたプロジェクトです。

建築や車輌のデザインを通して、ヒューマニティーとパブリック性をテーマに実現してきたと考えるプロジェクトをご紹介しました。

西村朗
ヘテロフォニーの可能性
日本人はいなくなる？

建物でいうとこの部屋は、これは結婚式に使う部屋ですね。不思議と日本中こんな感じですね。世界で類を見ない現象。それにしても、あまり結婚しませんね。三〇年間教員やっていて、適齢期男女を指導してきたが、葬式に行く一〇分の一

も結婚式がない。何を意味しているか。日本の人口が急速に減ってきている、簡単に言えば。ある調査によると、おそらく四〇〇年くらい先には、日本人をどう規定するか難しいが、一人もいないかもしれない。級数的に減るかもと哀しく思っていたが、地震で二万人以上亡くなっている。原発事故以降、それが死を誘発するのはこれからのことで、わからない。子どもをこれからつくって育てようとしている若いカップルは不安に思っている。そうすると、無理に子どもつくらない、ならば結婚もしない。そう進むと、日本の人口は四〇〇年ももたず三〇〇年くらいで一人もいなくなって、日本語で書かれたあらゆるものが役割を終えてしまうのか。さらに哀しく思う。

世界遺産に指定された奈良の法隆寺を、誰が見上げているんだろう。まあしかし私は音楽家ですので、文学者ほど深刻に思わないですけれど。音は、世界言語と言われている。ベートーヴェンの音楽も私なりに理解できる。翻訳してもらわなくても、直に私なりの感性で受け止めることができる。（プログラムのレジュメ）論旨と同じじゃ意味ないので、それを前段として、話を進めます。

バッハによる音楽言語の統一

ベートーヴェン後期の偉大な作品とされている、《ミサ・ソレムニス（荘厳ミサ曲）》、この曲の実演をあるところで聴いた。パリのノートルダムでした。二〇一〇年春頃、パリにたまたまいたので聴きにゆき、その時、愕然とした思いに捉われた。この偉大なはずのミサ曲は、全然神に届かないのではないのか？ なぜか？ これは表現と言語が豊かすぎるのではと思った。人間へのメッセージとしては素晴らしい内容をもっているが、神にこんな複雑なことを言う必要があるのか。

そこで、さらにベートーヴェンのみならず、一八世紀以降の作曲家の仕事について、ある共通したことがあると思った。それは音楽言語の統一ですね。一七五〇年にバッハが亡くなりますが、その段階で、一応、作曲における音楽語法、記譜法も含め完成されました。バッハが完成者と言っていい。その完成を受けて、バッハの死の二〇年後に生まれたベートーヴェンは表現に向かった。豊かに準備された音楽言語、形式・様式での自己表現。それで彼は、自信をもち、一つ一つの作品にはじめて署名した作曲家です。自信をもって署名している。立派なことで、尊敬してやまない。作曲家と呼べる明確な存在の出現はベートーヴェン以降だと思う。

しかしながら、共通共有する音楽言語に問題があるのかないのか。あると思う。バッハに《平均律ピアノ曲集》という、すべての調を利用した見事な鍵盤音楽作品集がある。ここではすべての調で作曲が可能であることが示されます、すごく高級な例として。平均律とは何か。作曲家にとっては、たしかにとても便利な言語手段です。音程の比率が一オクターブ違うと振動数が倍になるという、一対二というのでオクターブができていて、これは平均律でも一応その倍数で上までずっと行く。それはいいが、一オクターブの間の半音をすべて均等な距離で割っている。だから基音が一個動いても、その比率が変わらないので、すべての調が同じ条件で音の関係性を保っていることになる。だから、ある調からある調へ移っても問題ない。音階の形状が変わらない、そのまま移行できる。それで作曲家は何をするかというと、転調を利用するんです。たとえばハ長調からト長調、極端な場合ハ長調から変イ長調へ転調したり、嬰ハ長調へ転調することもできる。どこの調へも行ける。文法文体がどんどん進化複雑化していって、それが頂点に達するのは一九世紀末頃で、アントン・ブルックナーという偉大な作曲家、彼のシンフォニーは転調に次ぐ転調。転調することが目的かと思うくらい。短いモチーフがいろんな調に移っていく。それで曲ができている。こういう例は多々ある。

平均律の濁り

音楽が言語的に複雑化していった。しかし重要なポイントは、平均律で純粋に二対一というきれいな比率で響いているのは、オクターブだけ、他は犠牲になっている。だから完全五度なんて言葉でいうが、完全じゃない。はなはだしいのは長三度。たとえば、ドとミの音。

たまたまここにピアノがある。調律がちゃんとしているか知りませんが、ドの音♪で、これはC、これを叩くと自然倍音的には、一応♪このような倍音列が上方に、この音一個弾いただけで、鳴っているはずなんです。これが基音、第二倍音が一オクターブ上で、第三、第四、……第五がミ。この第五倍音を耳で探ってみたい。このへんの音が倍音として聞こえますから、耳を澄ませてください。

どうでしょう。僕にははっきり聞こえる。そしてこれがピアノのミ♪。自然倍音とのずれで、こんなに響像が揺れている。鍵盤で弾くドとミの和音♪、これがピアノの長三度という音程ですが、濁っている。こんな不純な響きをわれわれは、転調を優先するために聞いてきた。早期音感教育が大切とか言いつつ、こんな響きを子どもたちに馴染ませ聞かせてきた。こういう響きは神に届かないかも。神が求めているのはもっとピュアな響き。昔の音楽、平均律が無い頃の教会音楽はきれいな五度で響いていた。そういう音楽は神に届いていた。そして神が応えてくれていた。バッハ、ベートーヴェン以降の音楽は、神が応えてくれなくなった。怒られるかもしれない、音楽家がこんなこと言うのは、神学者じゃないから。しかし、なんとかしなければならないと思ったのは、僕だけじゃない。

岡部先生のお話のなかにポンピドーセンターが出てきた。そこのイアカム（IRCAM）、われわれはイルカムと呼びますが、そこは音響研究所で、とくにここで育った一群の作曲家たちは——スペクトル楽派というのですが——本来ピュアに響く倍音の列を見直そうと試みた。たとえば管弦楽の音楽を書いても、音響だけならピュアな音をつくりだすことはできる。ただし記譜法はややこしいことになる。シャープやフラットだけでなく、ナチュラルとシャープ間の半分シャープとか、四分の一音、八分の一音とかの単位で音を指定する。そしてその音をプレイヤーが正確に出すと、驚くべき音が立ち昇ってくる。眼鏡の度が初めて合ったみたいな（笑）。今までなんて澱んだ音を聞いてきたんだろう！ きれいな響きを取り戻そう、スペクトル楽派の仕事はそこから始まった。これは神に届く響き！ しかしピアノにこれを適用すると転調ができなくなる。

われわれのミッションとは？

何を大事に考えるか？ 今まで多様な言語化のため、平均律を尊んできたのだが、多くの不自然さや濁りが生じる。

再び僕は神に問いかけたい。なぜ人間は存在するのか？ われわれのミッションは？ 原発事故で思った、一人一人のミッションとは何かと。建屋内で仕事する人は大変。できる人とできない人がいる。僕にはとうていできない。では個人の任務とは、さらにいうと、人類全体のミッションは何だろうか。なぜ人類は存在するのか。その意味は何なのだ。それに答えるのは神のみだ。ずっと問いかけていたはずの音楽も、神に届いていない。新たな音楽言語で神に問い直したい。

人類が存在しているのは人類のためであり、それ以外のためでもあるとはっきり言えるか？ 今人類の半分が亡くなったら人類の半分は悲しむ。しかし一斉に死んだら誰が悲しむのか？ たとえば地球は悲しむか？ あるいは宇宙が悲しむか？ 宇宙は、人間が宇宙の存在を認識しようと努力する姿を愛しているかもしれない。「あ、そこまでわかったの？ そうね、一三七億年前が発端だよ。今の温度は、絶対温度三度だよ」。いろいろわかってきて、認識が進み、宇宙は喜んでいるかもわからない。これはもう宇宙を神と言い換えてもいいかもしれません。そういうミッションかもしれないが、ほんとにそうなのか？ あるいはもっと別なことがあるのではないか？

異質なものを一つに——ヘテロフォニーの可能性

そこで、原発と直に関係するわけではないが、以前から新しい自分にとっての音楽言語、この言語で問いかけたいという言語を手にしたいと思った。西洋人が限界をもっているのは明らかで、純正調をとるか平均律かの二者択一が限界だと思った。しかしそれは彼らのミッションで、僕のミッションでない。もっと違う観点から一つの音を捉え直してみたいと思った。そこで考えたのは、純粋であるとか一つであるとかを、音響上どう捉えるか？ 仏教では、一滴のなかに宇宙があるとか、一粒の砂に全宇宙を見るとか、一はすなわち全部である。たくさんのものが一つというものをつくっている。僕にとっての一つの音を、たくさんのものの集合体にしたい。それによって言語の次元が変わるんじゃないか。純粋とは別の一つの単位。僕は「ヘテロフォニー」と言っている。その意味は、異質なものが寄り集まって一つの音楽単位になるという意味。異質のままの併存ならヘテロフォニーじゃない。一つになって初めて、それはヘテロフォニーという音楽単位と呼ぶに値する。たとえば、私とゴキブリとは似ているところもあるが、似てないところも多い。この二つを並べてこれがヘテロであると言うことは意味がない。ところが北沢先生と僕を並べてホモだと言っても、これは別の意味が発生するが（笑）、人間としてはヘテロ、似ているから。でも別なものをもっている、一つには頭のできがまったく違う。が、それらが一つになったとき、何か新しい一つになる。さらにもっとたくさんのものも一つになり得る。

音響現象は面白いもので、たとえば振動周波数をほぼ同じにしていくと、波形が全然違っても一つになって寄り合わさっていく。すると新しい音色・質感が生まれる。

それは濁りではない。宇宙の一滴の水のような響きの単位。この喜びに出会ったために、僕はピュアな音をほとんど書くことがない。でも、単一純粋なものに対する憧れも常にあります。ピアノ曲を書いたとしても、本当の倍音列の音と、平均律で調律された音との間に、モワレ、揺れが起こりましたね。あれも一種のヘテロなんです。楽器の構造上、やむをえぬ条件下でヘテロを生じさせる姿。それを否定的でなく捉えて、新しい一つのために活用する。ピアノのもっている不具合をむしろ積極的に新しい一つのために活用する。こうした考え方はもしかしたら他にも応用が可能で、異質に見える多くのもの、文化的なものでも工学的なものでも、新しい一つを生みうることがあるのかなとも思います。冒頭に日本人がいなくなっていくといったが、日本人にこだわらないで新しい人類というものが、そこに育っていくのなら、それはそれでいい。今は国境や言語、宗教など排他的な壁もいろいろとあるでしょう。でもやがて達成される人類のヘテロフォニーといった未来。そういう人類の響き。その響きのなかに日本人や伝統も混入してゆけばよいのかもしれないなどと、夢想したりもしています。話がとりとめなく変にふくらんでしまいましたが……。

北沢方邦

補遺

「フクシマ」が要求するパラダイム・シフト

西村さんの話のなかで、平均律は西洋の音楽的合理化の頂点だが、その合理性が音の濁りという非合理性を生んでいるというご指摘があった。これが音楽にかぎらず近代文明の一番大きな矛盾です。他の皆さんのお話のなかでも文明に内在する矛盾が数々指摘された。こうした点から「知と文明の転換」はどうすべきか、あとで皆さんと討論していただきたい。

コーディネーターとしてはさしでがましいが、補遺的な報告をさせていただく。文明の転換期には、まず科学の大転換、トーマス・クーンのいうパラダイム・シフトが起きる。それで世界像が変わり、思考体系が変わり、文明が変わっていく。近代文明のはじめでは、コペルニクスの革命が起こる。コペルニクスの天文学は、一三世紀を頂点とするイスラム天文学の業績の継承であり、当時の国際語であるアラビア語をコペルニクスも学び、ボローニャやパドゥヴァの大学でイスラム文献を渉猟している。地動説や地球が球形であることは、イスラム天文学、さらに遡ればプトレマイオス以前のギリシャや古代インドでは常識だった。コペルニクスのこの革命が、近代の科学革命に火をつけた。そこからサイエンスに限らずあらゆる領域で、西欧文明は合理性を追求していく。「フクシマ」は、経済的・科学的合理性追求の頂点として出現し、大事故という巨大な非合理性を引き起こした。いまこの人間を

ヒルベルト空間は単なる数学的道具ではなくリアリティを表現している。つまりわれわれの世界に無数の目に見えない世界が重なっている。それらが相互に直交することによって、われわれの世界は決定論と見えるのだ、と。これを多重世界解釈というが、一時期メディアを賑わしたが、コペンハーゲン解釈の主流派からはまったく無視された。ヒュー・エヴェレットはその復活を見ることなく死んだが、この多重世界解釈はストリング理論の登場とともに復活することとなった。

たとえば原子核を構成するハドロンとよばれる重いタイプの粒子は、二つのクォークの強い相互作用で加速器のなかで異常な振舞いをする。標準理論では解釈できない。ベネチアーノが一つの解釈を提出し、その直後南部陽一郎が「ハドロンを構成する粒子はストリング、つまり弦ではないか」という解釈を提唱した。ペアとなる粒子はじつは弦であり、自在に変転して乱雑な動きに見えるが、位相的には同一であると。もっとも彼はそれでノーベル賞を受賞したのでなく、標準理論を補強するビッグバン時の粒子の「対称性の自発的破れ」理論で受賞している（ノーベル物理学賞はきわめて保守的）。南部とは別に、同じ発想からシュウォーツとマイケル・グリーンがストリング理論を提唱した。物質の最小単位は一〇のマイナス三三乗センチメートル前後の空間に存在する点としての粒子ではなく、一〇のマイナス三三乗センチメートルという究極の微小空間に存在する弦（ストリング）である、と。それによって重力がゼロであった粒子に対してストリングは重力をも担い、いわゆる四つの力すべてが記述できることによって、アインシュタインが夢見た標準理論を超える統一理論が可能になった。

ストリングが実在するためには、最低で一〇次元または一次元の超空間が必要とされる。それも無限次元のコンパクト化であるとも言われる。つまり多重世界解釈の復活である。ただし、余剰空間はその微小な世界に巻き込まれているなどさまざまな解釈があるが、それぞれの世界または宇宙はブレーンによって隔てられ、重力以外はブレーンを超えることはできない、という主張が主流となりつつある。ブレーンとはメンブレーン（膜）の省略形でいまや物理学の術語となっているが、われわれの体内の酸素の貯蔵庫となり、身体や脳をうごかす

分子生物学によるパラダイム・シフト

もう一つのパラダイム・シフトは生物学である。量子力学に相当する画期的な発見は、RNA、DNAの発見から始まり、生物の遺伝子の仕組みを解明した分子生物学である。一方で量子力学にしたがう原子力開発と同じく、遺伝子操作や開発という危険なパンドラの箱が開けられることとなったが、その認識論的価値は大きい。他方、ゲノム（遺伝子配列）が詳細に明らかになってきて、世界観転換の一つの出発点となる。ミトコンドリアなどを除くヒト固有の遺伝子の数は約二万個、ショウジョウバエは一万三六〇〇個、そんなに差はない。まして哺乳類はもっと近い。「哺乳類は皆兄弟、仲良くしましょう」ということになる。アメリカ・インディアンのいう「人間は二本足のヒト、動物は四本足のヒト、鳥は空を飛ぶヒト、魚は水のなかのヒト」なんです。もう一つは、ダーウィンの進化論の書き換えです。コペンハーゲン解釈と同じく、生物学では広義のダーウィン主義が絶対的に支配していた。分子生物学でも創始者の一人ワトソンが、すべては遺伝子が決定するという遺伝子決定論を唱え、この新ダーウィン主義が猛威ふるっていたが、最近崩壊している。

なぜなら、微生物科学の発達で、ウィルスやバクテリアの生態や機能がきわめて明確になり、生物だけではなく、無機物を含めてこの地球の生態系ではすべて互いに複雑に相互作用をする「共生（シンバイオーシス）」によって進化してきたことがわかってきた。たとえばわれわれの体内のすべての細胞に寄生するミトコンドリアは、ほんらい発疹チフス菌の一種で、大昔猛威ふるったにちがいないが、定着すると逆に、

疎外した合理性追求文明の転換が必要とされている。

統一理論と標準理論

いま文明の転換の予告編として科学のパラダイム・シフト、とりわけ物理学や生物学でいわば革命が起きつつある。それを簡単に説明したい。アインシュタインの特殊・一般相対性理論はすでに時空や重力の概念に革命を起こしたが、そのあと登場した量子力学は、われわれの物質の最小単位である粒子の世界が、原因が先立って結果が起こるという古典的因果律さえ成立しない不条理な世界であることを発見した。ファインマンは時間に逆行する電子もあると主張している。古典的なわれわれの巨視的世界とそれの折り合いをどうつけるか、解釈が大問題となる。この不条理な世界を包み込む統一理論をつくろうとアインシュタインやその後継者たちは苦闘したが、成功しなかった。

それに対してコペンハーゲン学派（ニールス・ボーアの主導する）は、近代の合理論の基礎であるデカルト的二元論と同じく、われわれの古典的・決定論的世界と、不条理な微視的世界、つまり確率論的世界はまったく別の世界という二元論を採用し、これがのちに素粒子の「標準理論」または「標準モデル」として完成された。それを実証すべく各国は巨費をかけて加速器や衝突機などを建設し、競い合い、ほぼその理論は実証されたとしている（このシンポジウム後 CERN の LHC がヒッグス粒子を検出し、標準理論は完成されたとする）。

多重世界解釈とストリング理論

他方アインシュタイン以来、一元論としての統一理論を追及する努力がつづけられた。一九五七年、当時プリンストン大学院生ヒュー・エヴェレットが博士論文でとんでもないとされる理論を発表した。つまり微視的世界の不条理性はわれわれの世界をも貫いている。量子力学で使われる無限次元の

酸素の燃焼エネルギーを供給してくれる。ミトコンドリアがいなければ、人間の思考能力がこれほど拡大し、新皮質が大きくなり、言語や文化を創造することはできなかったかもしれない。ミトコンドリアやその他の体内のバクテリアやウィルスとの共生によってヒトが進化したのだ。すべての生物がそういう共生のネットワークでむすばれて進化した。

もう一つはエピジェネティクス、私は後発性遺伝学と訳しているが、それがダーウィン進化論を大きく書き換えている。つまりダーウィン主義によって絶対的に否定されてきた獲得形質の遺伝である。環境との相互作用によってゲノムが変化し、遺伝するというものである。人間の言語についてチョムスキーが昔、母語の学習は後天的だが、ヒトの原語能力そのものは先天的、つまり遺伝すると主張して新ダーウィン主義者の総攻撃を受けたが、今やそれがエピジェネティクスで証明されたといってよい。共生と獲得形質の遺伝という進化論の徹底的書き換えが生物学のパラダイム・シフトをうながしている。

サイエンスの最先端にあるこれらの考え方、つまりパラダイム・シフトが、われわれの世界像を大きく変えようとしている。コペルニクスの登場で近代の開始が告げられたように。それら科学革命が脱近代文明の開始を予告している。

補論

北沢●再開します。後半はパネリスト相互の討論です。坂本さんお話足りなかったようですが、市民のたたかいの補足をお願いします。

格差と貧困とのたたかい

坂本●市民のたたかいは、現在起こっている格差に対する抵抗が一つ。ただグローバルな現実を見て、考えなければならないことは、われわれは成長主義に対して批判的ですし、その端的な表れとして脱原発ですが、ところが、世界の大多数の人間は、どうやって貧困から脱して成長しようかと切実に願っている。それを忘れて、われわれは高度資本主義に達したから、そろそろこの辺で考え直そうとしている。そのことは自体は正当な問題提起であり、重要な課題だが、経済成長を切願せざるをえない人々と、われわれはどういう対話ができるかは、考えなければならない。これは実は私たち自身の問題であり、これは、一つの「たたかい」です。

多文化主義を内面から捉える

それから、先ほどの西村さんの話と関係があるのですが、文化が違う一方で、今、世界でしくなっている。それにどう対応するのか。さきほど日本人はいなくなるかもしれないとおっしゃったが、私もそうなればいいと思う。しかし残念ながら、そうではなくて、「非日本人は日本から出て行け」という声が若者の間に結構ある。「地方参政権」を要求する在日の人にもそういう言葉が投げつけられる。日本だけでなく、欧米の「先進民主主義国」でもそれが深刻な問題になっていることは、ご承知のとおりです。要するに異文化に対して、どう対応するかというときに、文化が違うんだから別居しようという考え方は、依然としてある。あるいは、文化が違うから差別しても当然だという態度や行動が、ヨーロッパのなかで、ムスリムに向けられている。文化が違う人間との共存は不可能だという思想による、多文化主義の崩壊です。だから国境でお互いを区切ろうという考え方が依然としてあるわけです。そういう考え方は、少し「上品な」言葉で言えば、文化の多様性は認めるが、それぞれの文化は固有のものだから、それを純粋に守ることが必要だ、となる。日本の例で言うと、いわゆる「新しい教科書」を主張する人たちは、「純粋日本人」という人間ないし民族がいると思い込んでいるのです。そういう歴史観で教科書をつくろうと主張している。そうした発想や神話を信仰する人というのは、いなくなる方がいい。

私は、純粋文化とか純粋社会とかはありえないと思っています。それぞれの社会集団なり国なりが、固有の文化という要素をもつのは当然だが、ただここで厄介なことは、それではたとえばイスラムを対等に扱おうというと、すぐ起こってくるのは、「女性に平等の権利は確保されているのか?」という問題。文化によっては女性差別があってもいいのか? それが「文化の平等なのだ」と言い切れるか? そうは言い切れないが、しかし文化を差別してはいけない。このジレンマが示すように「多文化主義」は綺麗事でなく、生々しい問題を起こしています。念のために言い加えれば、コーランには女性差別の言葉はない。それは部族の慣習に過ぎなかったり、あるいは、ムハンマドの戦死者の寡婦に対する一夫多妻の許容の曲解でしょう。

私は、文化の多様性を認めることの基礎に普遍的なものがあると考えていますが、それは別として、われわれ自身が言わばハイブリッドなのです。純粋日本人はいない。私は韓国でその話をしたことがありますが、「日本文化」のなかに朝鮮文化、中国文化、インド文化、ペルシャ文化、さらにヘレニズム文化がしみ込んでいる。仏像を見れば一目瞭然です。ですから、われわれ自身が多文化存在であると内面的に自覚することが、多文化との共存を可能にするのであって、外にある異文化と、できるだけ仲良くしようというような問題ではありません。

人間存在への新たな問いかけ

さきほどの北沢さんの話を伺っていて思ったのですが、ガリレオが、地動説を唱えて教皇に睨まれ、公式には撤回しつつ「それでも地球は動く」とつぶやいたと言われていますが、その頃から、神や教皇の言う通りには現実は動いていないのではないかという疑問がハッキリと提起され始めた。宗教とか神という領域が、それとして存在することは否定しない。しかしそれとは別な自然という存在があり、それには固有の法則がある。これが科学の基礎です。

神という確固たる存在があり、それとは別に自然という確固たる存在がある。そう意識した瞬間に、では「人間」の存在と、

人間存在の意味とを、いかに確証できるか、という問題に直面せざるをえない。人間の存在の根拠を「思惟」に求めたデカルトがその例です。神の存在を人間の良心のなかに見る。一七世紀からの宗教改革も、人間存在の新たな意味付けでした。こうした、「人間とは何か」という人間存在の新たな意味付け（その裏返しとしての懐疑）を追求するのが近代の思想だと言えるでしょう。それは、今日のわれわれに残された問いだと思います

北沢●西村さんもそういう問題提起をされました。文化の違いの問題は坂本さんが問題提起されたわけですが、その辺音楽を通じていかがでしょう。

「中国のラフマニノフ」の凄さ

西村●文化という言葉が広く意味をもつものですから、使う時と場合、人によって意味が違うところもある。私は音大の教員でもあるので、具体的な例で少しお話しますと、日本の音楽大学の優秀な学生の多くは卒業後に留学するんですね。たとえば、ベートーヴェンを勉強しようというピアノ科生はドイツへ行く。ハワイ大学でベートーヴェンを勉強しようという留学生はまずいない。そして日本に来るドイツ人のピアノ科留学生はいるのかというと、これもまたきわめて少ない。当然かも知れないが、ベートーヴェンの勉強にドイツ人が日本に来ることは奇妙だと、一般に思われていましょうね。でも僕は変でもなんでもないと思う。ドイツでドイツ人がベートーヴェンを勉強してももう得ることは無いのではないか。伝承を受継ぐという意味ではあるにせよ、さらなる創造的な演奏表現をもし考え求めるならば、異なる伝統文化のなかでベートーヴェンがどのように捉えられているかを勉強したほうがはるかに意味があると思う。

たとえば、近年大注目のランランのようなピアニストの場合、何を弾いても中国の音楽みたいに聞こえる。ぜんぜん悪びれない。ラフマニノフを弾けば「中国のラフマニノフ」で、彼が弾くとみな中国音楽になる。これは凄い。その主体性はけだし。たしかに、「坂の上の雲」を目指して生きていく時代は明治からあったが、坂の上ばかり見ていると、道というのは下り坂もあるし谷もある、転ぶばっかり。平坦な道を、ゆっくり自然を楽しみながら歩くという生き方も大事です。

モリスですが、その別荘はイギリスのコッツウォルズにある。彼はコッツウォルズの自然から学んでいる。作業場はロンドンだが、デザインの発想はコッツウォルズの自然から。羊の丘です。NHKも世界で一番美しい村として、BS番組をつくっている。羊の丘を歩くような形でやっていっていいし、さきほどご紹介したが、自然に歯向かうやり方が問題ではないか。

モリス・賢治による地域立て直し

地域のかまぼこの話をします。閖上（ゆりあげ）という町の、「佐々直」というかまぼこ屋ですが、テレビにも出ましたからご存じの方もあるでしょうが、割合早く復興した。問題は佐々直ではなく、ランクが下の手焼きでつくっている小さな店です。今度の津波で駄目じゃないかと言われたが、七月二三日のミクシィの日記で書いたように、それらの店が復興して、初めて品物を出した。チラシの宣伝文句を読みます。

「私どもは大津波により、社屋も三つの工場も本店もすべてを失いました。新しく生まれ変って、お店をつくりました。すべて手づくりのため、毎日つくる数量に限りがございます。全国から寄せられたご支援、エールに応えるために、伝統の味、技を絶やさず、次の世代に残したい。苦しくても立ち上がる。閖上が好きだから、閖上がふるさとだから、元気な笑顔でみなで福を興します。手触り笹かまぼこ、一枚ずつ丹念に焼いてます」

地場産の野菜や素材を使った揚げかまぼこというので、「さき主」という店なんです。それに対して、マイミクの方がこんな事言ったんです。「今、仙台から帰ってきました。先生がおっしゃったササカマ探しましたが駅には売っていなかった。でも駅で見た七夕の飾りが今年は印象深く、心に残りました」。私は、「駅売りになるようなものは大量生産で、ほんものより凄いと思う。日本人も堂々とやれば、海外から見て、日本人のベートーヴェン表現は面白くて創造的なものがあるじゃないかとなるのではないか。異文化ゆえの強み。感覚が異なっているから新鮮で、ドイツ人の興味をも引くかもしれないのだ。

近年、ベネズエラで、若いドゥダメルという指揮者を中心として、オーケストラが子どもたちによってつくられ、今や世界最高水準と言われる評価受けている。貧しい環境で非行に走らせる代わりに楽器を渡して、どんどん育てあげる。国策ですよね。彼らのもっている身体的文化的感覚は、ヨーロッパの音楽と異質なもの。だけどその異質性が起爆剤となって衝撃的な演奏が生まれている。異文化は異文化として、異なる点であるがゆえの利点をもっと生かしていいし、我田引水すれば、これは、あるところ僕はヘテロフォニーにつながるとも考えています。

北沢●関連する問題ですが、岡部先生、文化の問題、いかがでしょう。

一歩手前に戻って考える

岡部●私が携わっている建築の分野は、非常に多様化していることも事実。世界の人口は拡大している。二〇世紀初頭のニューヨークも大変なスピードで建設されたが、その何倍ものスピードで今日アジアや中東の都市が建設され、多くの超高層ビルが建っている。技術力は増しているが、世界の都市は人間が住むようなまともなものになっているか？　バランスを欠いたものが多く見えているが、坂本先生がご指摘のように、発展していく国、追っかけていく国にとっては、急速な建設がすべての前提となっている。投機的なものも多い。考慮されなくてはならないのは環境の問題、人間性の問題だと思う。シンガポールでは建築やインフラの建設計画に合わせて大規模な緑化計画がすすめられている。

現代都市のベースとしての近代を顧みることは重要かと思われる。第一次大戦、第二次大戦後には、社会主義的思想がはっきりしていた。貧しくても最低限の保証をしていこうとした時代があり、その積上げのなかで日本や西欧世界ができあがってきた。そのパターンは今日ではそのまま適応することはできないが、いくつもの示唆を見つけることができると思う。今日の膨大な技術力でつくっていく都市にどう向き合うか？

僕らが言えることは、一歩手前に戻ってもう一度見直してみることかと思う。今回の震災後考えたのは、実際に戦争があったあと何ができてきたかという点だった。たとえば戦争で疲弊したフィンランドでは、仮設住宅ではなく復興住宅を急速につくり、それが今も改造されながら都市のなかでちゃんとしたものとして残っている。そうした小さな例を見つめるとともに、第一次大戦、第二次大戦後の時代のなかから学びとれていけるものがまだあるのかなと思っている。それらを梃にしながら、現在のコンピュータの計算能力を十分に活用しつつ、人間性に規定に置いたアプローチを進める方法に意味を見出したいと考える。

ゆるやかな歩行

大内●アジアやアフリカが経済成長を追求するのは当然。日本の場合、成長戦略がないじゃないかと、僕は呆れはてている。しかし成長する力が、だいたい日本にあるのか、今までのような成長パターンでやれるのか。これは無理なんですよね。成長しようとすると円高になって、工場は海外へ出ていくだけだし。たしかに、「坂の上の雲」を目指して生きていく時代は明治からあったが、坂の上ばかり見ていると、道というのは下り坂もあるし谷もある、転ぶばっかり。平坦な道を、ゆっくり自然を楽しみながら歩くという生き方も大事です。

モリスですが、その別荘はイギリスのコッツウォルズにある。彼はコッツウォルズの自然から学んでいる。作業場はロンドンだが、デザインの発想はコッツウォルズの自然から。羊の丘です。NHKも世界で一番美しい村として、BS番組をつくっている。羊の丘を歩くような形でやっていっていいし、さきほどご紹介したが、自然に歯向かうやり方が問題ではないか。

モリス・賢治による地域立て直し

地域のかまぼこの話をします。閖上（ゆりあげ）という町の、「佐々直」というかまぼこ屋ですが、テレビにも出ましたからご存じの方もあるでしょうが、割合早く復興した。問題は佐々直ではなく、ランクが下の手焼きでつくっている小さな店です。今度の津波で駄目じゃないかと言われたが、七月二三日のミクシィの日記で書いたように、それらの店が復興して、初めて品物を出した。チラシの宣伝文句を読みます。

「私どもは大津波により、社屋も三つの工場も本店もすべてを失いました。新しく生まれ変って、お店をつくりました。すべて手づくりのため、毎日つくる数量に限りがございます。全国から寄せられたご支援、エールに応えるために、伝統の味、技を絶やさず、次の世代に残したい。苦しくても立ち上がる。閖上が好きだから、閖上がふるさとだから、元気な笑顔でみなで福を興します。手触り笹かまぼこ、一枚ずつ丹念に焼いてます」

地場産の野菜や素材を使った揚げかまぼこというので、「さき主」という店なんです。それに対して、マイミクの方がこんな事言ったんです。「今、仙台から帰ってきました。先生がおっしゃったササカマ探しましたが駅には売っていなかった。でも駅で見た七夕の飾りが今年は印象深く、心に残りました」。私は、「駅売りになるようなものは大量生産で、ほんものより品質は落ちます。農生産物、加工品も含め、大量生産になるとほんものではない。日本の消費者はほんものを賞味できなくなっている。モリスがなぜアート&クラフト運動をして、職人の技を大切にしようとしたか。賢治がなぜ、『農民芸術概論要綱』を書いたか。ほんものを大切にしようとしたからです」という返事を書きました。そこへ戻って、地域を立て直していく。モリスや賢治に戻って、地域を立ち上げたい、そういう気持です。

アラブの春への期待とその不透明性

北沢●今の話で思い出したのですが、人類学者のマーシャル・サーリンズが、『石器時代の経済学』を書いている。とてつもなく生産力が拡大したが、競争であらゆるレベルの格差が拡大した社会に比べ、昔の経済はむしろ豊かで自由・平等・友愛の社会であったと、ルソーの考えを人類学的に裏づけている。私も、経済成長がなくても社会は存続するし、別の意味で豊かにもなりうると考えている。

最近、「アラブの春」がメディアはじめ、世界を賑わせている。今後の世界、坂本さんの専門ですが、国際政治を考えていくうえで一つの大きな転換の鍵になっていると思いますが。

坂本●おっしゃる通りだと思うが、春のあり方が、欧米で期待しているようなものであるかどうかわからないし、一番厄介な問題はイスラエルです。春が盛んになれば、アラブの権利蹂躙の上に成り立つイスラエルの恐怖感が強くなる。するとアメリカはそれに縛られる。さきほど言いましたが、共和党系、ティーパーティなどの反応を含め、アラブの春がアラブ世界や中東の世界に安定をもたらすか、まだ即断できない側面があると思う。私にはアラブの友人、またイスラムの友人が結構いますが、彼らは固有の価値を主張しながらも、西洋近代の意味も十分に認める。学ぶべきものは学ぶがわれわれの信仰や価値観は変えないという、そういう、いい意味での多文化主義、グローバルな多文化主義をもっています。そうした人びとが、どのくらいの影響力をもつか、アラブも一つではなく、事態は非常に複雑ですから、断定的なことは言えませんね。

アラブの春の脱近代

北沢●最近ロビン・ライトというアメリカのジャーナリストが、『ロック・カスバ（カスバを揺さぶれ）』という本を書いた。カスバとは北アフリカの迷路みたいな城塞都市ですね。ニューヨークタイムズ書評を読んで面白かった。彼女は、アラブの春が政治革命、社会革命であるだけでなく、深い意味でイスラムの文化革命であると。私もテレビで見て、「あれ？」と思ったのは、タハリール広場に集まった人たちのなかに、淡いピンクというか、オレンジがかったヒジャーブをかぶった若い女性がいっぱいいて楽しげに談笑している。ロビンの本を読んだら、〈ピンク・ヒジャーブ〉というフェミニズムと社会の改革運動組織で、コーランの読み直しをしている。コーランには守旧派が主張しているような女性差別的な言葉などどこにもないんだと。女性の権利の復権を進める団体で、急速に広がり、今回のエジプト革命の主役の一つを演じたと書かれている。彼女らはヒジャーブを被るのに見られるようにイスラムを信仰している。西欧に民主主義や自由を学ぶが、それをイスラム的に変換していくという。表面には見えないが、アラブ社会に深く隠れた「文化革命」が進行していることを紹介している。ハンティントンの文明の衝突とか、逆に世界は近代民主主義と自由市場によって統合されていくというフクヤマの理論など、こうした側面から見ても破綻している。アラブの春を見ていると、世界が少しずつ脱近代の方向に大きく変わりつつあるという印象を強く受けました。

これで、シンポジウムの幕を閉じます。

一般財団法人「知と文明のフォーラム」設立記念会見（聞）記

去る十月一日、日本出版クラブ会館にて、この「知と文明のフォーラム」が一般財団法人として出発する記念会が催された。午後一時のシンポジウム開始から設立記念パーティー終了の八時まで長時間にわたる催しであったが、会場には支援、賛同してくださる方々の熱気が一貫してあふれていた。撮影係としてその場に身をおいた者として、何枚かの画像をとおして、その熱気の一端をお伝えできればと思う。

さて午後一時、総合司会をつとめる宇野淑子さんの発声とともに第一部が始まった。シンポジウムのテーマは「知と文明の転換のために」である。壇上には、坂本義和、大内秀明、岡部憲明、西村朗、北沢方邦、と錚々たる顔ぶれが並んだ。国際政治学の坂本先生は「二一世紀の地球政治的課題」、経済学者の大内先生は「東日本大震災と文明の大転換　宮沢賢治とW・モリスに学ぶ」、建築家の岡部先生は「パブリックスペースと人間性」、とのテーマでそれぞれ興味深く、刺激的な発言をされた。写真は四番目のパネリストである作曲家の西村先生がマイクを握っているショットである。「ベートーヴェンについて思うこと」と題されたテーマで、平均律発見後の西洋音楽の和音は神に届かないのではないか、という発言が妙に印象に残った。それ以上に印象的だったのは一番若くて、髪の黒々とした西村先生の発言に他のパネリストが熱心に耳を傾けている光景である。このあと構造人類学者の北沢先生から全体の補足というかむしろ締めくくりとして、科学認識論によるパラダイム・シフト、すなわち物理学における二元論からの転換と生物学におけるダーウィン進化論の転換、の提示がなされた。

世上では、シンポジウムというと、とりわけ学術的なものは、たいがいパネラーの誰かがまるで裁判官のごとく目をつぶって他のパネラーの論を無視している光景が一般的だと思う。いったい何度そんな姿を見せつけられたことか！　それに対してこの写真のパネラーたちはどうか。岡部先生は筆記具片手に聞き耳を立て、大内先生は身を乗り出して注視におよび、坂本先生は少年のように頬杖をついて耳をかたむけ、北沢先生は納得顔で聞いている。一幅の絵ではないだろうか。

レクチャー・コンサートの第二部は、作曲家の新実徳英先生、ピアニストのパーク・ヨンヒさん、音楽社会学者でもある北沢先生、この三方の鼎談から始まった。北沢先生の講義を神妙に聞くパークさん、それを腕組みして泰然と耳に入れる新実先生。先のシンポジウムと打って変わって、淡々とした姿が心に残るシーンであった。とはいえ、新実先生の「アリランから未来へ」と西村先生の「アリラン幻想曲」の音を表現する在日のパークさんは、彼女ならではのアリランへの想いを、独自のエネルギーを込めてピアノに託していた。

次なる一枚は、夕刻の六時からの設立記念パーティーでのショット。言わずと知れた評論家の樋口恵子先生だ。堂にいった語り口がマイクを前にした映像から彷彿とする。なるほど、彼女の敬愛する青木やよひ先生の在りし日の姿を語って余すところがない、絶妙のスピーチであった。

と、こんなくあいに、一時から八時まで時のたつのを忘れるほど、熱気横溢する充実した設立記念会であった。フォーラムの会員として参加できてこれほど充足したことは、ともかく言っておきたい。

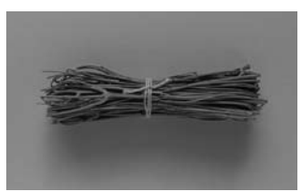
（片桐　記）

特別セミナーの報告

二〇一二年四月一四・一五日の両日にわたりヴィラ・マーヤに北米先住民ホピとともに暮らす今井哲昭さんをお招きし、お話を聞きました。ブログに掲載された印象記を再録します。

幸せを生きるホピの人たち

四月一五日から一六日にかけて、ホピ在住の今井哲昭さんと時間を共にした。伊豆高原のヴィラ・マーヤでのひとときは、時間が停止したかのような、まことに不思議な体験であった。今井さんの話の内容もさることながら、その存在そのものが日本人を超越していて、



ホピのお茶「ホホイシ」（煎じて飲む）

彼と空間を共有していること自体がホピ体験であったような気がする。

「そこが面白いんですよー」と会話がはずむことに、今井さんは古くて大きな鞄からホピの証を取り出して見せてくれる。色とりどりのトウモロコシであったり、畑から発掘された化石であったり、カチナ（精霊）の絵であったり。私たちは紫色に煎じられたホピのお茶、ホホイシを飲みながら彼の話に耳を傾ける。爽やかな、どこか懐かしい味がする。

ホピには、過去もなければ未来もないという。あるのは現在だけ。過去に縛られていては生きていけないし、未来のことは神のみぞ知る。ただ、「今」を生きなさい、ということだろうか。文字を持たないホピ族には、当然のことながら書かれた歴史書は存在しない。しかし、そうだからといって、歴史が存在しないことにはならない。人間が生きるということは、歴史を積み重ねていくことである。私たちは歴史から学ぶ一方、それに束縛され、押しつぶされそうでもある。ホピに於ける歴史とは何であるのか。

「ただ生きていけばいいんだよ」。今井さんは、母上が亡くなられる直前に言われたこの言葉を大切にしている。ホピの人たちは、この母上が到達された境地を、日々生きているのだ。生まれてから死ぬまで、人々の役割はほぼ決まっている。家族と村（今井さんの村は七〇〇人位、全人口は約一万二千人）が生活の中心であり、農作業と祭りに明け暮れる毎日である。人と人の絆が固く、自らの立ち位置が明確な社会では、人は不幸を感じることはないだろう。自殺者がほとんどないのはもっともなことだ。

ホピの人たちは西欧文明を意識的に遠ざけている。しかし学校は存在するし、テレビも家庭に入りつつある。ホピの人たちの今の暮らしのあり方は、はたして存続しうるのだろうか。この私の質問に、今井さんは明確に「イエス」と答えた。それは祭り（祭儀）があるからだと言う。ほぼ月に一度催される祭りにこそ、宗教を中心とするホピ社会維持の秘密がありそうである。それは、私たちには容易に知ることができない、しかし、高度に洗練された社会的システムであるような気がする。腰を落ち着けて、ホピの知恵を学ぶ必要がありそうだ。

二〇一二年四月一九日　　jmosa

Simple and Humble way

今井哲昭さんに伺ったホピの話は本当に刺激的でした。

今井さんは、「ホピから見ると、ここがヘン」、「日本はこれでいいんですか?」と、何度もおっしゃいました。

●ホピの村では、仰角一〇度で全方位星空が広がる。

空を見上げることで、宇宙とつながっていることが実感できる。

今井さんは、「星が見えないところで暮らせない」とおっしゃる。

●西洋文明に触らないよう生きている。

祭りと儀式の毎日。精霊たちと生きる。神話を生きる。

村から離れず、皆と暮らす。

●皆で集まって同じものを食べることが大事。

掲示板や回覧板があるわけでなく、会食があることは口コミで伝わる。

最近は、フードスタンプで、ジャンクフードを食べる人もいる。

支給された生活補助や年金で、（本来禁止されている）お酒を飲む人もいる。

●女性は、結婚しないと死後に精神世界へいけないとされている。

結婚が決まると、婚礼に先立ち、女性は婚の実家で二週間暮らし、その間に婿の親族の男たちが織った白い綿でローブを作ってもらう。

死んだら、魔法の絨毯みたいにそのローブにくるまって、あの世へ行く。

●結婚と出産は別。結婚までに一人や二人子どもがいることが多い。

拡大家族で大所帯、子どもは村の皆で育てる。

女子は大勢子どもを産む。一〇人、多い人は二〇人も産む。

子どもは大勢いる。

男の子たちは早く一人前になってカチナ・ダンスを踊りたいと思っている。

●男は畑、女は家

働かなくて愛想をつかされた夫は、実家へ帰っていいことになっている。

出戻り男子は大勢いる。

●文字を持たず、記録を残さない。

徹底してオラルな（口承・伝承の）文化。

ホピは記録を残さない。神話や言い伝えや秘儀も、口で伝えていく。

※今井さんのお話を伺う数日前のテレビ番組で、「自らのあらゆる記録を残す人が増えている」傾向を報道していて、真逆だと思った。

自分の瑣末な記録を世界中からアクセス可能にしておくことで、立ち位置を確認している人の孤立した姿と、過去を参照せず、将来に不安をもたず、たった今を皆で生きているホピの人びと。

●簡素に慎ましく生きる。

「私には、この約束を交わす神も長老もいない。不安と不満渦巻く社会でgreedy に生きるのは辛い」と言ったところ、今井さんは、「勇気をもって田舎へ行くのです。空を見て農業をするのです。こんなに水と緑が豊かな日本で、都会にいるのはもったいない」と、強調されました。

●ヒト・モノ・カネが動かない。

畑で作るのは、儀式で使うトウモロコシや豆。

換金作物は作らず、余剰産物も（儀式目的以外に）貯蔵しない。

民芸品として人気のあるカチナ（精霊）人形や銀の宝飾品作家もいるが、たくさんは作らない。

周囲二五〇キロは誰も住んでいない。

●お祈りで一日が始まる。

父なる太陽が母なる大地から現われる瞬間が、神聖な時。

皆、夜明け前に起きて、祈りで一日が始まる。

以上、印象に残ったフレーズを日ごろの反省とともに箇条書きにしてみました。

カタオカ★M

「知と文明のフォーラム」セミナー報告

二〇一二年
●五月一九・二〇日　第一九回セミナー
企業の文明論的展開
講師：日置弘一郎

去る五月一九日と二〇日の両日、伊豆高原のセミナーに参加し、日置弘一郎先生のお話をうかがいました。

経済学ｖｓ経営学の観点から、生産を重視する経済学と生産・消費・廃棄まで考える経営学の対比がとても新鮮でした。フィジカリティーの欠如する経済学（この場合マクロ経済学のような気がしますが）と身体性を基軸とする経営学は、この限りではもちろん経営学に軍配があがるのでしょうが、経済学者側の反論をうかがいたくなります。ここには、理論と現場という、近代以降そもそもから両立しがたい、とりわけ学問分野の細分化にともなっていよいよその傾向が強い、一大問題が横たわっていると思いますが、それはともかく、生身の人間を勘案すべき経営学のリアリティーには、いちいち頷かされました。わたしにとっては、まったく思ってもみなかった〝経営学〟の世界が提示されました。

しかし、さらに頷かされたのは、市場の「市庭（いちば）」化の可能性というか、提言です。網野善彦から示唆された、この「市庭」論こそ今回のセミナーの白眉でした。

ところで、赤坂憲雄の『異人論序説』によれば、もともと「市」というのは、山の民と平野の民（つまり移動の民と定住の民）という異なる社会の者たちが、たとえば熊の毛皮と米を交換する場として、二つの社会の境界に開いたものだといいます。南米アンデスなら、高地と低地をつなぐ場です。海抜数千メートルの階段畑の作物と海産物をつなぐ窓口ということになります。

そのような「市」は、これまでわたしにとって興味深い対象としてあったのですが、日置先生の「市庭」からは、結節点というより、もっとそれ自体として自立的な、ある種自然な力をもつ有機体的構造物が見えてきます。売れ残ったものの再利用までとことん考え、すべてのものを、あるべき循環のなかに還す営みの場です。それを、先生は「人間の振る舞いの場としての市庭」と表現されました。

該博な、しかも実地検分つきの情報に裏打ちされた〝経営学〟セミナーでした。こういう講義は大学生ばかりでなく、一般市民の方々に是非とも聴講していただきたいものです。

むさしまる

活動の記録

二〇〇六年
三月一八・一九日　第一回セミナー「ヨーガとインド哲学1」
講師：北沢方邦
五月二七・二八日　第二回セミナー「性差とジェンダー1」
講師：青木やよひ、北沢方邦
七月一五・一六日　第三回セミナー「ヨーガとインド哲学2」
講師：北沢方邦
一一月二五日・二六日　第四回セミナー「野生の思考」
講師：杜こなて、青木やよひ、北沢方邦

二〇〇七年
二月二日　第五回セミナー／レクチャーコンサート
「不滅の恋人にみるベートーヴェンの変貌」
講演：青木やよひ／楽曲解説：北沢方邦／ピアノ演奏：パーク・ヨンヒ／会場：ルーテル市ヶ谷センター
三月三日　第六回セミナー／公開シンポジウム
「北欧型教育と日本の教育」
パネリスト：伊藤美好、佐藤全、古山明男、リヒテルズ直子／会場：日本女子大学
一〇月一三・一四日　第七回セミナー「性差とジェンダー2」
講師：青木やよひ、北沢方邦、杉山直子

二〇〇八年
四月一九日　第八回セミナー／レクチャーコンサート〈世界音楽入門Ⅰ〉
「世界音楽入門＆西村朗のタベ」
講師：北沢方邦、西村朗／演奏：上野信一、蛭多令子、藤本隆文、松永加也子、上野信一＆フォニックス・レフレクション／会場：セシオン杉並
六月一四・一五日　第九回セミナー「食料・身体性・環境セミナー1」
講師：安田節子、青木やよひ、北沢方邦
一一月一・二日　第一〇回セミナー「二一世紀の市民的公共性」
講師：篠原一、青木やよひ、北沢方邦

二〇〇九年
一月二四・二五日　第一一回セミナー「人間にとって労働とはなにか――ウィリアム・モリスから宮沢賢治へ」
講師：大内秀明、北沢方邦
四月二五日　第一二回セミナー／レクチャーコンサート〈世界音楽入門Ⅱ〉
「新実徳英の世界：螺旋をめぐって：生命の原理」
講師：北沢方邦、杉浦康平、新実徳英／演奏：長尾洋史、永井由比、寺岡有希子、上森祥平、上野信一＆フォニックス・レフレクション／会場：セシオン杉並
六月二八日　第一三回セミナー／公開シンポジウム「食料・身体性・環境セミナー2」
「食の現状・農の未来」
パネリスト：植田啓子、片柳義春、安田節子／司会：北沢方邦／会場：北沢タウンホール
一〇月二四・二五日　第一四回セミナー「生殖革命と人間の未来1」
講師：江原由美子、中嶋公子、長沖暁子、青木やよひ／司会：石田久仁子

二〇一〇年
六月一三日　第一五回セミナー／レクチャーコンサート
「ベートーヴェンの生涯」を聴く――《悲愴》から《ディアベリ変奏曲》へ
鼎談：北沢方邦、西村朗、高橋アキ／演奏：高橋アキ／会場：津田ホール
九月一一・一二日　第一六回セミナー「日本の安全保障と今後の世界」
講師：坂本義和、北沢方邦
一〇月三〇日　第一七回セミナー／シンポジウム「生殖革命と人間の未来2」
パネリスト：江原由美子、中嶋公子、長沖暁子／司会：石田久仁子

二〇一一年
七月九・一〇日　第一八回セミナー「芸術を容れる建築――ポンピドーセンターとそのコレクションからみる女性展」
講師：岡部憲明、岡部あおみ、北沢方邦

今後の活動予定

二〇一二年
九月二九日　第二〇回セミナー／レクチャーコンサート
「グエン・ティエン・ダオの世界」
講師：北沢方邦
対談：グエン・ティエン・ダオ＋西村朗
演奏：上野信一、奈良ゆみ、内海源太
会場：国立オリンピック記念青少年総合ホール小センター

一二月二二・二三日　第二一回セミナー「身体性について（仮）」
講師：橋本宙八、北沢方邦（予定）

事務局より

昨秋、わたしたちのフォーラムは一般財団法人となりました。これでひとつの社会的な形を整えたわけですが、それにともなう活動の充実が当然求められるでしょう。一方、前号で「わたしたちが生まれ育った山河は、いま、天災と人災によって、かつてないほど大きな痛みを覚えています」、と記した状況はほとんど変わらずに続いています。状況改善に、いささかなりとでも資する思考と運動を、と思っています。

なお当フォーラムではブログを開設しています。「北沢方邦の伊豆高原日記」、「楽しい映画と美しいオペラ」、「法曹界なう」、「おいしい本が読みたい」のほか、フォーラム関連の文化活動の案内、報告を順次掲載していますので、どうぞご利用ください。
http://blog.goo.ne.jp/maya18_2006/

ヴィラ・マーヤ便り　No. 5
発行日　2012年9月29日
発行所　一般財団法人　知と文明のフォーラム
〒413-0232 伊東市八幡野1105番地の57
代表　北沢方邦
編集部　TEL 042-488-3048 FAX 042-441-4565